P-101

1型糖尿病患者の学校生活に期待する支援

山本　裕子、山本　美桜
新見公立大学

1型糖尿病は希少疾患の一つであり、診断時（発症）年齢の分布では、幼児期と10～13歳（学童期・思春期）にピークがある。発症年齢のピークとなっている学童期・思春期の1型糖尿病をもつ子どもが学校生活を送る中で抱える課題として、友人の目を気にしながらインスリン注射や補食をトイレで行う、血糖測定を面倒と考え低血糖を我慢する、周囲の人に病気を話すことについての葛藤、特別扱いされることに嫌悪感を抱く、病気に対する偏見によりいじめられた経験がある等がある。

1型糖尿病患児は、外見では医療的なケアが必要であると分かりづらく、必要な支援を受けにくく、学校生活において前述したような課題を抱えやすい。しかし、1型糖尿病患児にとっても、生活の主軸となる学校生活において必要な支援を受けながら教育を受けることは当然の権利である。

そこで、本研究では、1型糖尿病患者の学校生活において必要としている支援を明らかにし、患児のQOLを高めるための支援について検討することを目的に、学校生活を終えた30歳代の1型糖尿病患者2名を対象に半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析を行った。分析の結果、1型糖尿病の子どもに対する学校支援の現状は、【医療的ケアが必要な生徒への教員の理解と支援】【教員の1型糖尿病への理解を深める医療者からの働きかけ】【学校生活を過ごしやすくするための家族からの働きかけ】【1型糖尿病に対する友人の理解と支え】の4カテゴリー、学校生活において期待する支援は、【良好な血糖コントロールを保つための支援】【疾患への正しい理解】の2カテゴリー、学校生活の中で感じる課題は、【学校で処置を行うことへのわずらわしさと抵抗感による血糖コントロールの難しさ】【病気への否定的な感情】【友人は病気を持っている気持ちを理解してくれないという先入観】【支援を受けるために患者に求められること】の4カテゴリーが抽出された。学校、医療者、家族の三者の患児に対する支援への共通理解と方針の一致が患児の学校生活を過ごしやすくすることへとつながっていた。周囲の支援や理解、受け入れが、患児自身の疾患の受け入れ、共に生きていこうという気持ちの手助けになっていた可能性もあり、患児の学校生活を支えるために今後も多角的な支援が重要であると考える。

P-102

小学校で医療的ケア児に関わる学校看護師の勤務継続プロセス –複線径路等至性アプローチによる1事例の検討–

林田　一子
兵庫県立大学看護学部

【目的】
小学校で医療的ケア児に関わる学校看護師が勤務を継続するプロセスを明らかにし、結果から勤務を継続する要因について検討する。
【研究方法】
歴史的構造化ご招待（HSI）に基づき、医療的ケア児が在籍する小学校に2年間勤務した学校看護師1名（以下、A氏）に、大学倫理委員会の承認を得てインタビューを行った。インタビューは、小学校に就業してからの経験について、大変だったことや有意義だったこと、勤務を続ける際に助けになったことを、ライフライン法を用いて時間の経過と流れに添って振り返りながら語ってもらった。研究協力者である学校看護師と研究者、双方の見方を融合させて分析結果を導き出すため、1回約1時間のインタビューを合計3回行い、2回目以降はインタビュー結果をもとに作成したモデル図を用いて行った。その内容を複線径路等至性アプローチ(TEA)で分析し、学校看護師の経験プロセスやその影響要因をTEM図で示し、個人領域と社会領域に働く文化的な力である「社会的諸力」を明らかにし、勤務を継続する要因について検討した。付記：本研究はJSPS科研費（23K09910）の助成を受けて実施した。
【結果】
A氏のインタビューをTEAで分析し、等至点(EFP)を[学校看護師を続ける]としたTEM図を作成した結果、[児の卒業まで関わって健康を維持させたい]が2nd-EFPであった。必須通過点(OPP)は[児の入院で欠勤するように言われる]、[児との関係性の深まり]、[教育の効果および児の成長を感じる]であった。社会的助勢(SG)は[担任との関係性の良さ]、[校長が看護師の雇用を守るよう市教委に掛け合う]、[学校看護師グループチャット]であった。個人的助勢(PG)は[学校の中に入れた喜び]、[勤務が3ヶ月継続していない]、[3年先を見据える機会]、[自分ができることをしよう]、[児の成長を見守りたい]であった。個人的方向づけ(PD)は[学校看護師の仕事がわからない]であった。
【考察】
就任1年以内の社会的諸力に着目した勤務継続要因として、A氏自身の子育て経験から「学校」という組織への強い関心によるPG[学校の中に入れた喜び]が考えられた。PD [学校看護師の仕事がわからない]がSG[学校看護師グループチャット]とつながる力となり、就任2年目以降のOPP[教育の効果および児の成長を感じる]経験を支えるに至っており、A氏のPGだけでなくPDが社会的な資源とつながる力および契機となっていたと考えられた。

Presented by Medical*Online